

(2) 教師

丸山が親炙した一高の教師としては、まずドイツ語の菅虎雄が挙げられる（画像：第一高等学校アルバムより〈丸山彰氏提供〉）。

大学でドイツ文学を専攻しようと考えていた丸山が法学部政治学科に進路を変更した



ことには、父の忠告とともに、菅の数時間にわたる説論も影響したという。また、加藤周一も習った片山敏彦（ドイツ文学）の『ファウスト』講義に感銘を受けた。ほかに丸山の回顧に登場するのは、立沢剛（ドイツ文学、文芸部長）、ブルーノ・ペツォルト（ドイツ語、夫人は東京音楽学校教師ハンカ・ペツォルト）、竹田復^{きかえ}（漢文学）らである。東京女子大学丸山眞男文庫に収蔵されている高校時代の受講ノートとして、須藤新吉「論理学」・「心理学」、出隆「哲学」、斎藤阿具「世界史」、マックス・アペル「哲学概論」がある。

当時、左翼運動の高揚に直面した文部省は、「赤化」「左傾化」を防止する思想統制のために「思想善導」政策を展開し、各校に思想善導教授を派遣した。一高では蠟山政道や高田保馬が講演を行ったが、丸山たちは彼らを「御用学者」と呼んでバカにしていたという。